

【ポスター発表】

一般就労を目指す知的障害者に対する自己理解及び相談スキルトレーニングの試み

○ 関西大学大学院 中村 隆行 (8551)

藤木美奈子 (龍谷大学・8492)

キーワード：自己理解、自己決定、就労移行支援

1. 研究目的

アメリカでの知的障害がある人に対するキャリア教育において重要視されることに「自己決定」がある(涌井, 2011)。本邦でも、福祉的就労から一般就労への移行が強調されるなかで障害者の主体性を尊重する自己決定を重視した実践もなされている(船橋ら, 2008)。しかしながら、そのような自己決定を重視した就労移行はまだ理念の段階にあり、自己決定力を促進する支援方法についてもより詳細に検討していく必要があると考えられる。また、自己決定力を育む具体的実践報告の多くは特別支援学校において進路学習として行われたものであり、就労移行支援事業所での実践報告はあまり見うけられない。

そこで、本研究では自己決定を行うために必要であると考えられる自己理解及び他者に相談するスキルを自己決定力の一つと捉え、就労移行支援事業所においてそのスキルを促進するトレーニングを試行的に行い、効果を測定した。

2. 研究の視点および方法

対象者 就労移行支援事業所に通う軽度の知的障害者2名を対象にした。対象者A(以下Aさん; 女性)は、訓練開始時30歳台で就労経験もあり、1児の母親でもあった。対象者B(以下Bさん; 男性)は、特別支援学校を卒業後すぐに就労移行支援事業所に入所し、就労経験はなかった。2名とも何かを自分で決めたり考えたりすることが苦手で、すぐに「わかりません」と答え、他者に判断を任せる傾向があった。

期間 週1回1時間程度のトレーニングを計8回、20XX年1月下旬から20XX年3月下旬にかけて実施した。

手続き トレーニング1回目では、自己決定の重要性並びに自己決定を行うにあたっては自己理解と他者に相談することが必要であることを説明した。第2・3回目では自身で自分をどのような人だと思っているのかについてワークを行った。第4・5・6回目では他者が自分をどのように思っているのかについてのワークを行った。第7回目では、自己評価と他者評価の違いについて考えた。第8回目では相談についてのロールプレイを行った。

測度 トレーニングの開始前後に小島・池田(2004)が用いた自己理解に関する質問項目(表2)について自己記述で回答を求めた。また、自己や相談の意義についてどの程度理解しているのか5件法で評定させた。数値が高いほど理解度が高いことを示す。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づき研究を行った。対象者に研究の趣旨、自由参加であること、途中で辞めることも可能であることを説明し、参加の了承を得た。また、施設長の許可も得た。

4. 研究結果

表2に自己理解に関する自己記述での回答の可能不可能、表3に自己理解得点を示した。表2に示したようにAさんはプレで2つの質問に答えることができなかつたが、ポストではすべての質問に答えることができた。一方、Bさんはプレよりもポストの方が答えられなかつた質問項目が2つ多かつた。自己理解得点については、Aさんはプレよりもポストの方が4項目について上昇した。一方Bさんは、プレの時から得点が高くポストとの差はほとんどなかつた。

表2 対象者ごとの自己理解に関する回答

| | A | | B | |
|------------------|----|-----|----|-----|
| | プレ | ポスト | プレ | ポスト |
| 自分のどんなところが好きですか？ | ○ | ○ | × | × |
| 自分のどんなところが嫌いですか？ | ○ | ○ | × | × |
| 自分のいいところは、どこですか？ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 自分の悪いところは、どこですか？ | × | ○ | ○ | × |
| どんな人ですか？ | × | ○ | ○ | ○ |
| どんな人になりたいですか？ | ○ | ○ | ○ | × |
| 昔はどんな人でしたか？ | ○ | ○ | ○ | ○ |

表3 対象者ごとの自己理解得点

| | A | | B | |
|----------------------------|----|-----|----|-----|
| | プレ | ポスト | プレ | ポスト |
| 自分の好きなところを理解している | 2 | 4 | 5 | 5 |
| 自分の嫌いなところを理解している | 4 | 4 | 4 | 5 |
| 自分のいいところを理解している | 4 | 4 | 5 | 4 |
| 自分の悪いところを理解している | 2 | 4 | 5 | 4 |
| 自分はどんな人であるか理解している | 2 | 4 | 4 | 5 |
| 自分はどんな人になりたいか理解している | 4 | 4 | 3 | 3 |
| 自分は昔どんな人であったか理解している | 4 | 4 | 4 | 4 |
| 困った時、分からない時、他の人と相談することができる | 1 | 3 | 3 | 5 |
| 他の人と相談することは、重要だと思う | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 合計 | 28 | 36 | 38 | 40 |

5. 考察

本研究では自己決定を行うために必要な自己理解と他者に相談するスキルの促進を目的としたトレーニングを行った。Aさんはトレーニング後、自己理解が深まり困ったときなどには事業所スタッフと相談してから決めることができるようになった。一方、Bさんはトレーニングの効果があまり見られなかつた。この違いの要因として、トレーニングへの準備性が考えられる。AさんはBさんと比較して年齢が高く、また就労経験や子どもがいるなど、実社会での経験値が多かつたために学びの姿勢が形成されており、自己理解を促進したと考えられる。そのためAさんは8回の短期トレーニングで効果が見られたが、Bさんは準備性が整っていなかつたために短期的なトレーニングでは効果に至らなかつたと考えられる。Bさんについては今後も引き続き、自己理解と他者に相談するスキルの促進、さらには自己決定トレーニングを実施する予定である。トレーニング効果の見られたAさんは、トレーニング終了後間もなく自ら選択・決定した職場に就職した。

引用文献

- 船橋英彦ら (2008) 一般就労を考える (2) —自己決定の実践をめぐって— 特殊教育学研究, 45, 340-341.
- 小島道夫・池田由紀江 (2004) 知的障害者の自己理解に関する研究—自己叙述に基づく測定の試み— 特殊教育学研究, 42, 215-224.
- 涌井恵 (2011) 米国における知的障害のある子どもキャリア教育の動向と日本への示唆 国立特別支援教育総合研究所紀要, 38, 19-30.